第７章

建築デザインと従来の土木デザイン、および景観デザインの評価基準の相違

第7章　建築デザインと従来の土木デザイン、および景観デザインの評価基準の相違

7.1 概要

7.1.1 第7章の位置づけと目的

第7章の目的は、1.7(4) の後半「建築デザインの評価基準は、従来の土木デザインや景観デザインの評価基準とはどう異なるのか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

建築デザイン教育の成果としての人材（建築家）や空間（建築や景観）には、景観的に見て、長所、短所があることが経験的に分かっている。日本の都市景観の、決して優れているとはいえない状況を見れば、建築デザイン教育が万全のものだとも思えない。つまり、建築デザインは景観的に見て歪んでおり、建築デザイン教育は歪みを拡大再生産しているのである。

建築デザインと従来の土木デザイン、景観デザインの評価基準の相違は、教育の相違に基づくと考えられる。この相違については、文献や経験によって分かっている部分もあるが、必ずしも明らかではない。これを明らかにしなければ、建築デザイン教育から何を学び、何を改良するべきか分からない。

第7章では、建築デザインと従来の土木デザイン、および景観デザインの評価基準の相違について把握する。

7.1.2 調査の内容と方法

建築デザインの評価基準については、第5章で日本建築学会賞（作品）（以下、第7章では建築学会賞と略す）の評価基準の調査を行った。

第7章ではまず、従来の土木デザインと、景観デザインの評価基準を把握するために、2つの土木関連の賞について調査する。一つは、優れた橋梁に贈られる土木学会田中賞（以下、第7章では田中賞と略す）である。従来の土木デザインの評価基準を把握するために、田中賞の受賞理由を調査し、何が評価されているのか分析する。もう一つは、土木学会景観デザイン賞（以下、第7章では景観デザイン賞と略す）である。これについても受賞理由の調査により、景観デザインの評価基準を把握する。

次に、景観デザインの専門家として、筆者が景観デザイン賞の評価基準に基づき、建築学会賞を受賞した建築と、田中賞を受賞した橋梁の評論を行う。

これらをふまえて、建築デザインの評価基準と従来の土木デザインの評価基準、景観デザインの評価基準の相違について考察する。

7.1.3 既往研究・参考文献

建築と土木の差異について論じた資料としては、土木学会誌における2度の特集記事がある。

■「特集　土木と建築　明日をどう描くか」土木学会誌，1985 年4月号

■「特集　建築と土木　コラボレーションとアンビバレント」土木学会誌，2001 年 10 月号

このうち特に参考になるのは、2001 年 10 月号である。その中のいくつかを紹介する。

成瀬は、自身の都市開発の仕事の経験に基づき、土木と建築の気質の違いなどについて次のように述べている[1]。

[1] 成瀬恵宏「その差異はどこから生まれるか？　都市開発の仕事を通じ"土木・建築"を見る」土木学会誌，2001 年 10 月号

・民間の仕事が半分の建築、役所の仕事が全部の土木
・正々堂々と発言する建築、妙に遜る土木
・社会を語ろうとする建築、技術を語ろうとする土木
・総合性の追求をする建築、専門性の追求をする土木
・感性での勝負を挑む建築、理性での勝負を挑む土木
・自らの提案に執拗な建築、比較案消去に熱心な土木
・各階の平面（床）で考える建築、勾配で考える土木
・著作権の問題に敏感な建築、今なお学習途上の土木

野城は、建築と土木両方の教育に携わった経験から、両者が教育面でお互いに学ぶべき点について、次のように述べている[2]。

[2] 野城智也「土木と建築の教育スタイル　お互いにどこを学ぶか」土木学会誌，2001 年 10 月号

・建築教育を受けた者はデザイン的思考法の影響を大きく受けているのに対して、土木教育を受けた者は最適化思考の影響を受けている。
・建築と土木では、公の感覚が異なる。土木では、国民（奉仕される側）と公務員や技術者（奉仕する側）の2つであり、建築ではまず個人がいて、そのまわりに家族や職場仲間といった個が属する集団があり、さらにそのまわりに、地域コミュニティーがあり、そのいちばん外側に「国」や「地球」があるという階層構造的な公の感覚をすりこんでいる。
・建築と土木では、職能意識が異なる。建築では専門が特化しているため、建築系学科の学生は、建築という仕事は、おのおのが得意技を出し合って行うものだという感覚を身につけている。土木系学科の教育現場では土木技術者はゼネラリストたれという気風が強く働いているように思う。
・建築では、相当な裁量と責任が一個人の職務に委ねられる。土木では一個人というよりも組織としての意志決定が重視されている。

以上のような記述は、筆者の経験からも頷けるものがあるが、あくまでも個人の経験に基づくものという留保が必要である。また、従来の土木デザインと景観デザインを区別しておらず、どちらかといえば、従来の土木デザインと建築デザインの比較である。

本研究では、論理的な根拠に基づき、建築デザインと従来の土木デザインだけでなく、景観デザインとの比較を試みる。

7.2 田中賞作品部門の評価基準

[3] 田中賞の概要は、土木学会ホームページの下記の URL に詳しい。
http://www.jsce.or.jp/committee/tanaka-sho/syusi.htm
また、田中賞受賞橋梁の一覧を資料編に掲載した。

土木学会の田中賞[3]作品部門は、優れた橋梁に贈られるものである。作品賞であるが、個人は表彰されないのが、建築学会賞とは異なっている。

> （田中賞作品部門は）橋梁およびそれに関連ある構造物で、計画・設計・施工・美観などの面においてすぐれた特色を有すると認められるものについて選考します。作品部門は、橋梁が多くの人びととの共同作業の成果という点から、受賞対象は企業者、設計者、施工者などの組織あるいは特定の個人ではなく、あくまでも作品そのものと考えています。これは他の土木学会賞と異なる特色です。（土木学会 HomePage から引用）

ここでは、田中賞の評価基準について、第５章で行った建築学会賞の評価基準の調査と同様の調査を行う。

7.2.1 既往研究・参考文献

田中賞の評価基準に関する研究や参考文献は見受けられない。

受賞した橋梁に関する紹介や選考理由は、土木学会から毎年発行されている書籍「橋」に掲載されている。

7.2.2 田中賞の歴史

田中豊は、関東大震災後、帝都復興院初代橋梁課長として隅田川にかかる永代橋、清洲橋など数々の名橋を手がけた日本の橋梁界、鋼構造界の育ての親である。

土木学会では田中を記念する事業として、昭和 41 年度より橋梁・鋼構造工学に関する優秀な業績に対して、毎年「土木学会田中賞」を授与している。

昭和 41 年度から平成 14 年度までに 175 橋が受賞している。初期は毎年２, ３橋が受賞していたが、近年は毎年４～９橋が受賞している。

7.2.3 田中賞の選定理由の分析

分析方法は、建築学会賞と同様に、受賞作品発表時に公表される、「選定理由」を分析した。分析方法は、あらかじめ評価項目を拾い出しておき、選定理由のなかで、その項目が評価されているかどうかを、作品ごとに確認した。そのうえで、年代別に評価項目が表れる頻度を集計した。

この集計では、選定理由における評価項目の重要度（作品を評価する上でその項目が重視されていたかどうか）は反映されていない。これについては、筆者が選定理由を読んで定性的に把握を行った。

分析結果をまとめたものが図 7-1 である。

7.2.4 田中賞の評価基準に対する考察

図 7-1 に示す調査結果や、受賞作品とその選定理由に基づいて、田中賞の評価基準について考察する。

(1) 評価項目が異なる

図 7-1 の凡例に示した評価項目は、筆者が選定理由から抽出したものであるが、建築学会賞のそれと同一ではない。評価項目の比較を表 7-1 に示す。両方の賞が評価する項目が多いが、独自の評価項目もいくつか見受けられる。

(2) 構造設計と施工・工法が主な評価の対象である

橋梁という大規模な構造物が対象であるため、構造や施工・工法が中心的な評価項目である。これは賞の発足から現代まで変わりのない特徴となっており、建築学会賞で意匠や計画が常に重視されているのとは対照的である。「技術の進歩」を重んじる技術者としての矜持が感じられる一方で、進歩とは何かという根元的な問いかけが全く議論されていないことに疑問も感じられる。

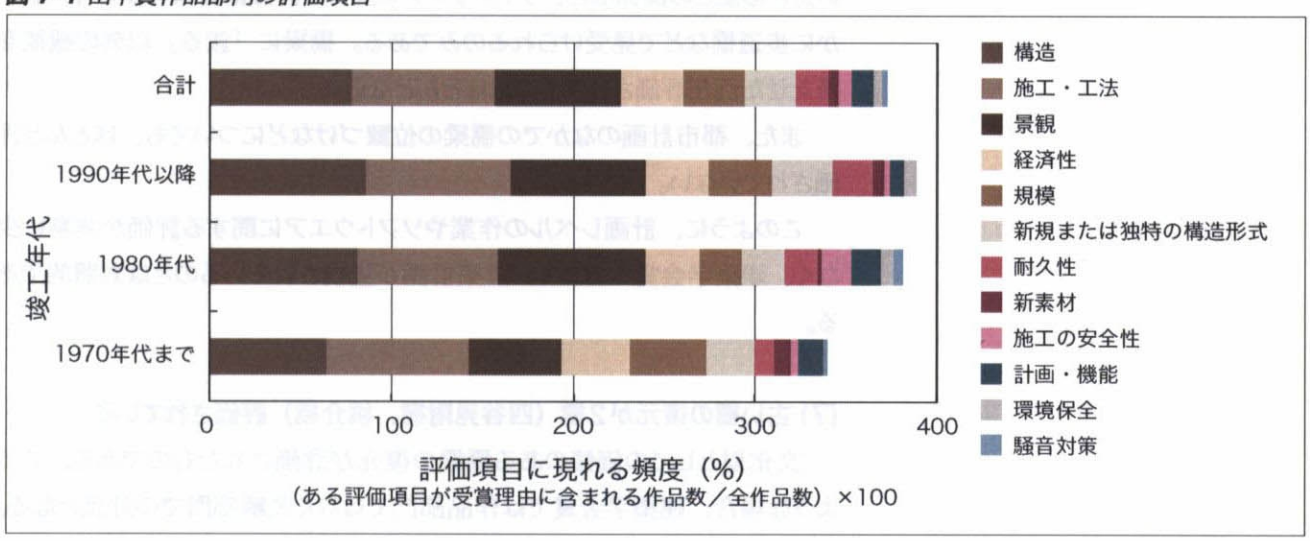
(3) 景観に関しても初期から評価項目に入っている

景観についても、初期から評価項目に入っており、頻度も多い。橋梁

表 7-1 田中賞と、建築学会賞の評価項目比較

	建築学会賞の評価項目	田中賞の評価項目
共通または類似の項目	意匠	景観
	景観（自然・田園・講演緑地）	
	景観（都市）	
	計画	計画・機能
	構造	構造
	施工	施工・工法
	経済性	経済性
	提案・示唆	新規又は独特の構造形式
	設備	環境保全
	耐久性・持続性	耐久性
土木学会田中賞独自の項目		規模
		新素材
		施工の安全性
		騒音対策
建築学会賞（作品）独自の項目	地域性	
	個性・情熱	
	建築外構	

図 7-1 田中賞作品部門の評価項目



は土木構造物の中では、比較的目立つものであり、その意匠は古くから重要な評価項目であったのである。

しかし選定理由を読むと、初期には景観に関してあまり詳しい記述は見受けられない。技術的な評価に関しては詳細に説明されているが、景観的な点に関しては、「考慮した」程度の記述にとどまっている。

1980 年代になると、景観に関する記述内容が豊富になっており、景観に関する意識の高まりを感じることができる。歩道橋では、技術的な評価は高くないが景観的に高い評価を受けたものが受賞する例[4]が表れてくる。

[4]1977 年度の田中賞を受賞した「蓮根歩道橋」は、そのデザインが高い評価を受けている。これ以降、デザインの良さが主要な評価となる橋梁が、田中賞を受賞する機会が増加している。

(4) コンテキストの概念は稀薄である

表 7-1 において、建築学会賞独自の評価項目に「地域性」がある。田中賞では、橋梁と、周辺との関係性についての記述は、「景観的な調和」程度であって、歴史的背景や地域の文化、風土などのコンテキストまで踏み込んだ記述はほとんどない。田中豊の作品である永代橋の堂々とした形態は、この橋が隅田川の第１橋梁であり、帝都のゲートとしての意味合いを持っていたことと大いに関係があるとされているのだが、「田中賞」の評価基準にはそのようなコンテキストの概念は残念ながら稀薄である。

(5)「空間」は認識されない

物体としての橋梁が評価されており、橋梁によって生まれる「空間」はほとんど評価されていない。土木技術者には「空間」という概念自体が認識の難しいものなのである。

このことは土木技術者が描く図面に良く表れている。土木の図面には橋梁そのものが表現されるが、空間の構成は表現されていない。

(4) と合わせて考えると、建築学会賞における建築の認識が自己完結的である一方、土木構造物はそれ以上であり、構造物の周囲に関する認識は乏しい。

(6) 計画レベルの作業やソフトウエアに対する評価が極端に少ない

橋梁の計画に関する評価は、橋梁本来の「渡る」という機能についての記述がいくらか見受けられるが、それ以外にはほとんど無い。橋梁の使い方と形態との関係など、ソフトウエアに関わる評価は非常に少なく、わずかに歩道橋などで見受けられるのみである。橋梁に「渡る」以外の機能を持たせた例が評価されたものはほとんどない。

また、都市計画のなかでの橋梁の位置づけなどについても、ほとんど評価されていない。

このように、計画レベルの作業やソフトウエアに関する評価が非常に少なく、建築学会賞において、建築計画が重視されているのとは対照的である。

(7) 古い橋の復元が２橋（四谷見附橋、桃介橋）評価されている

文化財としての価値のある橋梁の復元が評価されたものである。このような場合、建築学会賞では作品部門ではなく業績部門での評価となる。

橋梁が単なる構造物ではなく「文化」であるという認識は、近年の土木史研究の発展に負うところが大きいと思われる。

(8) 耐久性や維持管理についての評価が見受けられる

耐久性や維持管理に関する評価は多いわけではないが、建築学会賞に比べれば、田中賞では比較的重視されている項目である。

(9) 経済性や規模に関する評価は意外に少ない

安い、大きいという評価基準は「土木」を象徴するものというイメージがあるが、田中賞では4，5番目の評価項目である。

(10) 施工の安全性に関する評価が見られる

土木構造物の建設では、施工中に死亡事故が発生することも珍しいことではないため、施工の安全性が評価項目に入っている。これは建築学会賞には見られないものである。

(11) 審査員の構成と審査方法

田中賞の審査員は 20 人程度で構成されており、全員が橋梁の実務家あるいは研究者である。ジャーナリストや文化人、市民の代表などは審査員に含まれていない。任期は3年程度で、田中賞委員会の幹事によって任命される。また、審査員の氏名は公開されている。

田中賞の審査方法は大きな特徴がある。それは、議論が行われないことである。1次審査（書類審査）を通過した橋梁については、応募者によるプレゼンテーションが行われるが、その後に審査員相互の議論は行われず、無記名投票となる。投票結果は、橋梁名を伏せたかたちで、獲得票数のみがリストアップされ（つまり、A 橋は○票、B橋は○票 ....)、上から何番目までに田中賞を与えるかが決定される。その後初めて、どの橋梁が受賞したかが明らかになる。

したがって、どの審査員がどのような評価基準でどの橋梁を評価したのか、全く不明のままである。発表される選考理由は、審査員が無記名のコメントを提出し、それを幹事がまとめたものである。

7.3 景観デザイン賞の評価基準

土木学会、景観デザイン委員会による、「景観デザイン賞」は2001年に始まった新しい賞であり、本研究の執筆時点では第2回の選考結果が発表された直後である。景観的に優れた作品に対して賞が贈られるものであり、同じ土木学会の田中賞作品部門では、個人が表彰されないのに対して、景観デザイン賞では個人が評価されるところが異なっている。

そのほかにも次のような特徴がある。

- 顕彰の対象者は必ずしも設計部門に属する人とは限らず，施工部門など実質的に貢献した人を含む。
- 表彰者は、1件につき、5人程度以内。
- 竣工後、2年以上経たものを対象とする。
- 審査員は公開され、各審査員の評価基準も募集段階で公開される。また、選考された作品に対する審査員の講評も公開される。
- 審査では、審査員間での議論が行われる。

景観デザイン賞は、賞の歴史が浅いため、建築学会賞や田中賞で行ったような定量的な分析はできない。そのためここでは、景観デザイン賞の評価基準を、募集要項や受賞作品に対する批評から把握した。

7.3.1 既往研究・参考文献

資料としては、第1回、第2回景観デザイン賞の冊子[5]と、土木学会のホームページに掲載されている景観デザイン賞に関する説明[6]がある。これらから景観デザイン賞の評価基準を読みとることができるため、以下に引用する。

[5] 土木学会景観デザイン委員会編「作品選集2001」2001、および土木学会景観デザイン委員会編「作品選集2002」2002

[6] 土木学会　景観・デザイン委員会　の URL http://www.jsce.or.jp/committee/lsd/index.html

(1) 景観デザイン賞の趣旨

土木学会 景観・デザイン委員会では，優れた土木構造物を表彰することで、設計者，施工者ならびに事業者の意欲と水準を高め、美しい国土の形成に寄与することを目的とし、「土木学会 景観・デザイン委員会 デザイン賞（略称 土木学会デザイン賞）」を授与しています。

道路・街路・駅舎・河川・海岸・港湾・空港などの土木空間や、橋梁・堰堤・水門・閘門・堤防などの土木構造物を対象として、特に、その周囲との景観的，空間的関連のもたせ方や、当該の空間・構造物に対する機能的要請を美的にどう解決したかという観点に照らして、優れた作品を公募選定し、表彰します。

そのような優れた成果は、計画・構造設計・意匠設計・部材製作・施工・維持管理などの総合力と意志決定の柔軟なシステムなくして生まれ得ないため、その作品の形態を発想し、あるいは，全体をひとつにまとめあげるに際して実質的に貢献した人々を顕彰したいと考えています。この意味で、顕彰の対象者は必ずしも設計部門に属する人とは限らず、施工部門など実質的に貢献された方々の応募も期待します。（景

観デザイン賞 2002 の募集要項より)

(2) 第1回景観デザイン賞の審査にあたって重視した点

何が土木のデザインと形成にとって重要か。この議論は応募作品の中から何を優秀賞に残すかの審査員相互のやりとりの過程でより明確になった。重要なのは、次の2点である。

1) デザインという行為に要求されるトータリティ(全体性)に目配りがなされているか。更に言えば目的に向って諸課題を巧みに統合化出来ているか(アーキテクチャー)。

2) 長い寿命と強靭な耐久性を要求される土木固有の要件を満たしているか(我々はあらかじめこの点を重要視していた為、建築やデザイン分野の授賞制度にはない竣工後2年以上という応募要件を付していた)。

1) の要件に欠けていた為ユニークさを有しながらも落さざるを得なかった代表例は以下のような作品である。構造の新規性にもかかわらず、造形、ディテールがおろそかになった橋、面白い形の提案はあるが利用者への配慮に欠けた橋、アイデアの豊富さは理解できるが、それらの多彩な形を洗練し収束させる姿勢に欠けたダム群。2) の要件を欠いていた為残念ながら落とさざるを得なかった代表例は、洪水(自然の営為)への対応が不充分で竣工当初の空間の魅力を失ってしまった河川整備であった。(景観デザイン賞 2001 の総評より)

7.3.2 土木学会 景観デザイン賞の評価基準に対する考察

募集要項や受賞作品に対する批評から、景観デザイン賞の評価基準は次のような項目から成り立っていることがわかる。

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化
(b) 周囲との景観的, 空間的関連のもたせ方
(c) 長い寿命と強靭な耐久性
(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力
(e) 意志決定の柔軟なシステム

次節からは、建築デザイン、従来の土木デザイン、景観デザインの評価基準の相違を把握するために、上記の5つの評価基準に基づいて、建築学会賞受賞建築と田中賞受賞橋梁の評論を行う。

7.4 筆者による建築学会賞受賞建築の評論

7.4.1 評論の目的と評価基準

筆者は景観デザインの専門家である。民間の設計事務所で8年足らずの間、景観計画、基本設計、詳細設計、施工監理などを行った経験があり、その後の大学での経験も含めて、景観デザインに深く関わってきた。前節で明らかとなった景観デザイン賞の評価基準についても、概ね理解している。

この節と次節では、建築学会賞受賞建築と田中賞受賞橋梁を筆者が実際に見学し、景観デザイン賞の評価基準に基づいて評論を行った。それによって建築デザイン、従来の土木デザイン、景観デザインの評価基準の相違を把握する。

評論を行った建築物のリストを表 7-2 に示す。

景観デザイン賞の評価基準をあらためて次に示す。

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力

(e) 意志決定の柔軟なシステム

表 7-2 評論の対象とした建築学会賞受賞建築

受賞者	作品	受賞年	ページ
小林利助	日活国際会館	1951 年度	7-12
前川国男	日本相互銀行本社	1952 年度	7-13
前川国男	神奈川県立図書館並びに音楽堂	1954 年度	7-14
村野藤吾	広島世界平和聖堂	1955 年度	7-15
坂倉準三，前川国男，吉村順三	国際文化会館	1955 年度	7-16
大江宏	法政大学	1958 年度	7-17
前川国男	東京文化会館	1961 年度	7-18
今井兼次	日本２６聖人記念館	1962 年度	7-19
吉阪隆正	アテネフランセ校舎	1962 年度	7-20
伊藤鉱一，仲威雄	神戸ポートタワー	1963 年度	7-21
鹿島昭一，高瀬隼彦	リッカー会館	1963 年度	7-22
菊竹清訓	出雲大社庁の舎	1963 年度	7-23
村野藤吾	日本生命日比谷ビル	1964 年度	7-24
アントニン・レーモンド	南山大学	1964 年度	7-25
前川国男	蛇の目ビル	1965 年度	7-26
安東勝男，松井源吾	早稲田大学理工学部校舎	1967 年度	7-27
内井昭蔵	桜台コートビレジ	1970 年度	7-28
内田祥哉，高橋てい一	佐賀県立博物館	1970 年度	7-29
林昌二，矢野克巳	ポーラ五反田ビル	1971 年度	7-30
佐藤武夫	北海道開拓記念館	1973 年度	7-31
岡田新一	最高裁判所	1974 年度	7-32
浦辺鎮太郎	倉敷アイビースクエア	1974 年度	7-33
日本設計事務所	新宿三井ビル	1975 年度	7-34
山下和正	フロム・ファーストビル	1976 年度	7-35
畑利一	国立室戸少年自然の家	1977 年度	7-36
象設計集団，アトリエ・モビル	名護市庁舎	1981 年度	7-37
高橋てい一	大阪芸術大学塚本英世記念館・芸術情報センター	1981 年度	7-38
小倉善明，浜田信義	新宿NSビル	1982 年度	7-39
内田祥哉，三井所清典	佐賀県立九州陶磁文化館	1982 年度	7-40
槙文彦	藤沢市秋葉台文化体育館	1984 年度	7-41
石井修	目神山の一連の住宅	1986 年度	7-42
高松伸	KIRIN PLAZA OSAKA（キリン・プラザ・大阪）	1989 年	7-43

受賞者	作品	受賞年	ページ
葉祥栄	小国町における一連の木造建築	1989 年	7-44
真喜志好一	沖縄キリスト教短期大学	1991 年	7-45
六角鬼丈	東京武道館	1991 年	7-46
湯澤正信，長澤悟	浪合学校	1991 年	7-47
瀧光夫	シャープ労働組合研修レクリエーションセンターI&Iランド	1992 年	7-48
吉田桂二	古河歴史博物館と周辺の修景	1992 年	7-49
レム・クールハース	レム棟，クールハース棟	1992 年	7-50
内藤廣	海の博物館	1993 年	7-51
早川邦彦	用賀Aフラットをはじめとする一連の集合住宅	1994 年	7-52
レンゾ・ピアノ，岡部憲明	関西国際空港旅客ターミナルビル	1995 年	7-53
東孝光	塔の家から阿佐谷の家に至る一連の都市型住宅	1995 年	7-54
元倉眞琴	県営竜蛇平団地	1995 年	7-55
隈 研吾	登米町伝統芸能伝承館	1997 年	7-56
妹島和世，西沢立衛	国際情報科学芸術アカデミー　マルチメディア工房	1998 年	7-57
柳澤孝彦	新国立劇場	1998 年	7-58
武田光史	ふれあいセンターいずみ	1998 年	7-59
山本長水	高知県立中芸高校格技場	1999 年	7-60
谷口吉生	東京国立博物館法隆寺宝物館	2001 年	7-61
藤森照信	熊本県立農業大学校学生寮	2001 年	7-62
渡辺誠	地下鉄大江戸線飯田橋駅	2002 年	7-63

7.4.2 個別の作品の論評

(1) 日活国際会館（現日比谷パークビル） 東京都 小林利助 1951年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

あまり特徴のない、ごく普通のオフィスビルである。建設当時は、サッシュの納まりが斬新なものだったということである。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

丸の内の街並みは、かつては建物の高さがそろい、非常に美しいものだったが、近年は高層化が進んで、街並みの美しさが損なわれつつある。三菱地所の丸の内再開発によって、この建物も丸ビルと同じ運命とないように願う。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

昭和45年に所有者が日活から三菱地所に変わり、日比谷パークビルに改称、6～9階はかつてはホテルだったが、オフィスに変更された。外壁はタイルだったが、アルミパネルに改装された。その際には、現設計の雰囲気を残すように配慮があったという。ここまでは評価できたのだが、残念ながらこのビルは撤去、建て替えが決定している。経済的な利益の方が優先され、学会賞建築といえども撤去されてしまうのが残念である。

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力

建設当時は、施工方法が斬新なものだったということである。

(e) 意志決定の柔軟なシステム コメントなし

(2) 日本相互銀行本社　東京都　前川国男　1952年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

第1印象は、古びてくすんだ建物。なぜこれが学会賞なのかよくわからない。受賞時は、建物の外観に内部空間の機能や構造がうまく表現されている点が評価されている。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

受賞時の写真では、建設当時は、周辺にはビルがなかったようである。この建物だけが、モニュメンタルに目立ったのだろう。その状況を想像すれば、学会賞をもらったことが肯けないでもないが、周囲の状況が変化した現在では、その価値が低下してしまっている。今は、周囲の街並みの中に埋没している印象である。

現在は三井住友銀行になっている。隣にも同じ名前の銀行がある。建物が増築されたのだと思われるが、デザインの一貫性は特に考えられていないようだ。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

建物のメンテナンスを見ても、学会賞作品に対する敬意はあまり感じられない。

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし

(3) 神奈川県立図書館並びに音楽堂　神奈川県　前川国男　1955年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

建物前面の駐車場がいただけない。建物の美しさが、この駐車場のおかげで台無しである。また、敷地の入り口から建物までは、駐車場の車のすき間を縫っていかなければたどり着けないのである。ここは建設当初は砂利敷きの駐車場であった。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方　コメントなし

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

一度、撤去が計画され、保存運動によって残されたという経緯を持つ建物である。それだけ愛された建物であり、その点は評価できる。一部に、痛みの激しい部分が見受けられたことが惜しまれる。

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし

(4) 広島世界平和記念聖堂　広島県　村野藤吾　1955年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

第1印象は、実に素晴らしい。素材はセメント煉瓦と打ち放しコンクリートであり、くすんだ色の建物なのだが、セメント煉瓦のテクスチャーが大変美しい。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

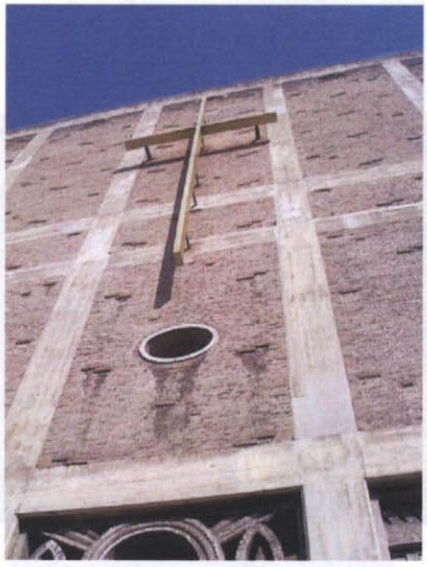
建物の前庭が広くとってあり、美しいファサードをよく見ることができる。周辺にあまり高い建物がないのも幸いしている。特に、背景に空しか見えないのが重要である。高層ビルの間に埋もれてしまったら、その価値がかなり落ちるだろう。

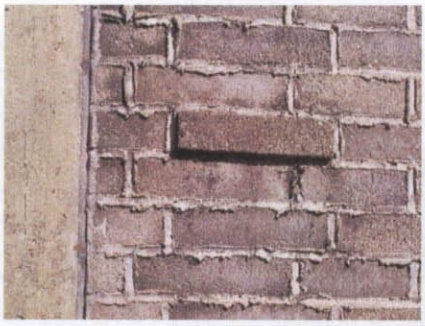
(c) 長い寿命と強靭な耐久性

この美しさは時代を経ても変わらず、むしろより美しくなるだろう。

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし





(5) 国際文化会館　東京都　坂倉準三，前川国男，吉村順三　1955年度学会賞

坂倉準三、前川国男、吉村順三の3人のコラボレーションというのが面白い。坂倉はコルビジェに建築を学んでいる。前川はコルビジェとレーモンドに学び、吉村もレーモンドに学んでいる。前川は2度目の学会賞受賞、他の二人は初の受賞である。

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

南山大学と同様にコンクリートの繊細な表現や、敷地の高低差を上手く利用した配置計画が見事であり、レーモンドの影響を感じさせる。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

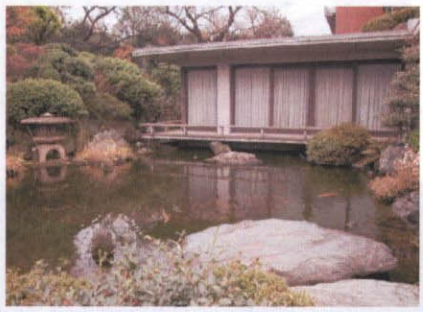
前面道路からの入口からは、建物のほんの一部しか見えない。また、道路からのアプローチは大きく曲がり込んでおり、奥行きを感じさせる。このあたりは日本的である。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

木製の扉など、すり切れた部分もあり年代を感じさせる。改修や増築を行いながら、大切に利用されている点に好感が持てる。

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし



(6) 法政大学　東京都　大江宏　1958年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

シェル構造の薄いコンクリートの屋根が、構造的な緊張感を感じさせる。大江宏はこの構造に不安を感じたが、スタッフの努力で実現したという。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

外堀に面して立地する法政大学キャンパスで、入り口正面の位置に学会賞を受賞した建物がある。かつてはこの建物が大学のシンボルであったのだろうが、今は、隣に超高層建築が建てられて、そちらの方がはるかに存在感がある。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

学生が利用する建物なので、概して扱いが荒く、はり紙や汚れ、痛みが目立つ。ファサードのカーテンウォールの美しさは健在だが、建物全体としては時間の経過によって味わいが出てきたとは言えず、老朽化してきたという印象の方が強い。

東京大学1号館が香山によって改修されたとき、外部の歴史的雰囲気を残しながら、内部は見事に刷新されたが、この建物をリニューアルするとしても、歴史や風格を感じさせるものとして残るとは、あまり思えない。単に、新品に戻ってしまうのではないか？

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし

(7) 東京文化会館　東京都　前川国男　1961 年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

コンクリートのキャノピーが特徴的な、前川国男の代表作である。コルビジェの影響が見られる。内部空間はコンクリートの造形や色の使い方がおもしろく、外観よりも魅力的である。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

上野駅公園口の目の前にあるが、建物の前面には樹木や公園の案内看板などの後ろで、あまり目立たない建物になっている。

公園の中にありながら、建物を眺める引きがあまりないことが惜しまれる。建物の周囲は、いつも通行人が多いので、建物を落ち着いて眺めることは難しい。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性　コメントなし

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし

(8) 日本26聖人殉教記念館　長崎県　今井兼次　1962年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

彫刻的な美しさの建築である。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

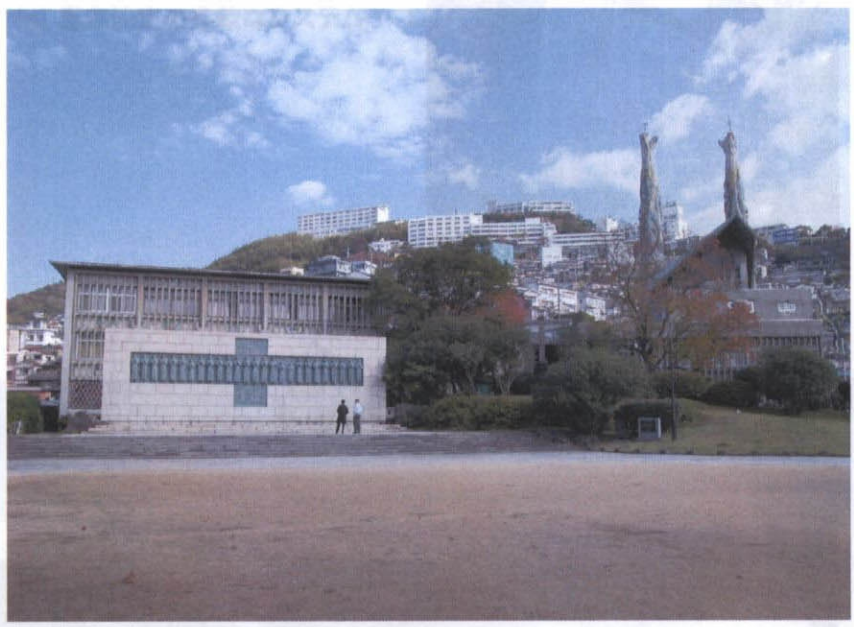
建築の前面に公園がある。そこは、ほとんど何もない広場になっているため、建築を眺める引きが確保され、建築にとって幸せな環境である。

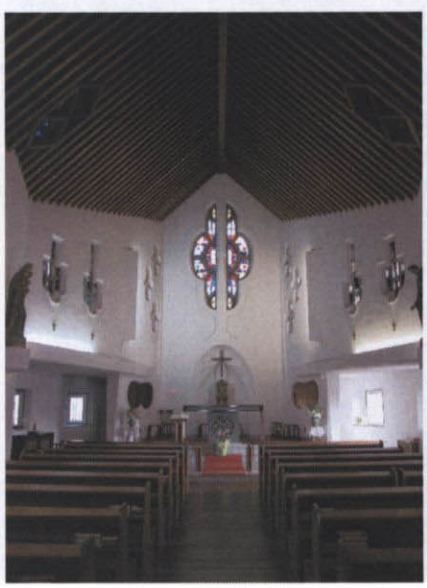
この建物は、長崎駅のすぐそばの山の中腹にある。もし駅前のビルが高さ制限されていれば、この建築がシンボル的に見えたであろうと惜しまれる。現実はビルの谷間からかいま見えるのみで、そこにそれがあると知っていなければ気づかない。また、駅から見ると背景にも（それも2つのタワーの真上に）巨大な建築ボリュームが見えるので記念館が目立たない。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性　コメントなし

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし





(9) アテネフランセ校舎　東京都　吉阪隆正　1962 年度学会賞

(a) 機能、構造、意匠等に関する諸課題の統合化

奇抜なと形容しても問題のないようなデザインである。

(b) 周囲との景観的，空間的関連のもたせ方

非常に個性的なデザインであり、周囲の街並みに調和しているとは言い難いが、あまり嫌みにも感じないのは、立地がお茶の水の大学などが集積した土地で、若者のエネルギーが満ちている場所であるからかもしれない。周囲を歩く若者の方も、かなり奇抜なファッションである。

(c) 長い寿命と強靭な耐久性

奇抜で個性的なデザインは、時間の経過とともに急速に色あせてしまいがちであるが、この作品には時間の経過に負けない強さを感じる。

(d) 計画から設計、施工、維持管理までの総合力　コメントなし

(e) 意志決定の柔軟なシステム　コメントなし